

“要”と“想”の機能について*

高山 乾 忠

The function of “xiang” and “yao”

Kenchu Takayama**

目 次

- I. はじめに
- II. “想”、“要”の分類
- III. 傾向性の“要”
- IV. おわりに

I. はじめに

中国語の文のかかなりの部分は主述文である。主述文はまず主語と述語の二つの部分に分けることができる。主語の部分で最も重要なのは中心語で、中心語の前に中心語を修飾、制限する連体修飾語を置くことができる。

述語の部分で最も重要なのは述語の中心語である。動詞が述語になる時には往々にして目的語が必要で、その中心語の前に修飾、制限など性質を持つ連体修飾語を置くことができる。述語中心語の後にはよく述語を補足説明する補語が置かれる。つまり、ひとつの文は主語、述語、目的語、連体修飾語、連用修飾語および補語などの部分から構成されるのである。これらの部分が一定の文法規則に従って文を構成し、厳格な語順を有するのである。通常は主語が前、述語がその後に置かれる。また、一般的な状況において目的語は述語の後に置かれるが、目的語が述語の前、あるいは主語の前に置かれることもある。連体修飾は必ず修飾する中心語の前に置かれる。連用修飾語は一般に述語の前に置かれるが、前置詞構文や時間名詞が連用修飾語になる時には主語の前に置くこともできる。補語は必ず述語中心語の後に置かなければならず、述語中心語の前に置くことはあり得ないということであるが、でも実際に学習している中、かなりいい加減なところもあることが判る。つまり、フレーズレベルでは語順は割りと固定しているが、文のレベルであると自由な側面がある。つまり主題となっているとき、本来は目的語の位置にあるようなものが文頭に置かれる。

“我看过这本书。”のように（私はこの本を読んだことがある）という解釈になるが、“这本书我看过。”は（この本は私は読んだことがある）という解釈になる。このように本などが仕手となり、つまり動作をする人に解されることはないので、自由な側面というよりも強調する部分を文頭に置くことによりそれを達成することができるのである。例えば、下記の単文を主題や話題による角度で解釈した場合には二の文になる。

“鸡不吃了。” a. (鶏は食べないことにした)

b. (鶏は餌を食べなくなった)

どこの国の言葉でも、基本は動詞であり、私たちは「そうだね」「つもりだ」能願動詞のようなものだけで簡単に返事をするができるが、中国語はその大事な動詞を無視して会話をするのがナンセンスなことになる。例えば、“我可能。”“我打算。”では話にはならないであろう。ちゃんとした“我可能去。”“我打算回家。”のような意志や目的など明確なものを動作によって表現することが必要である。

II. “想”、“要”の分類

① “想”は一般的に能願動詞として主に意向を表し、特に心づもりを表すのである。“想”は単独で述語になることができるのである。“想”は“要”より幅広い使い方がないため、教科書や他の参考書においては簡単な説明に留まっているのである。それでは“想”を用いる文を見てみよう。

能願動詞において(考える、推測、思う、心づもり)

“我想出一个法子来了。”

(私は一つ方法を考え出した)

“我想他不来了。”

(彼は来るのをやめたのだと私は思う)

“我有几个问题想问他, 但总是不好意思去打搅他。”

(彼にいくつかの問題をききたいと思っているが、じゃまをすると申し訳ないので、ずっと遠慮している)

* Received January 15, 2007

** 長崎ウエスレヤン大学 現代社会学部 国際流通学科, Faculty of Contemporary Social Studies, Nagasaki Wesleyan University, 1057 Eida, Isahaya, Nagasaki 854-0081, Japan

“我现在肚子不太好, 不想喝凉的, 想喝点儿热的, 来一杯热咖啡吧。”

(私はいまおなかの具合があまりよくないので、冷たいものではなく、熱いものが飲みたい、熱いコーヒーを下さい)

“他想打扑克, 我们去找几个人跟他一起打吧。”
(彼はトランプをしたがっている、何人か呼んで来て彼と一緒にやろう)

動詞、動詞連語を客語として (願う、…する、…したい、心配する、恋しく思う、なつかしく思う)

“要想学习好, 就得努力。”
(学習の成果をあげたければ、努力しなくてはならない)

“谁不想进步呢?”
(だれが進歩を願わないだろうか)

“想家。”
(家が恋しい) (家のことが気になる)

“时常想着前方的战士。”
(いつも前線の兵士のことを気にかけている)

“我很想你, 不是又病了吗?”
(私はあなたのことを思うあまり、また病気になってしまったのではありませんか)

“你可想着这件事!”
(きみはこのことを忘れないでよ)

② “要” はいろいろな用法があり、その使用頻度は “想” を遙かに越え、所謂網羅力が大きいということである。(ある行為を行う意志や必要性を表す。また、“了” と呼応し動作や状態の変化を示す。また、動詞や接続詞としての用法もある。)

能願動詞において (すべきである、したい、するつもりである)

“下星期, 我们要去北海道滑雪, 你去不去?”
(来週、私たちは北海道へスキーに行くつもりだが、あなたは行くのか)

“去外国旅行要有护照。”
(外国に行くにはパスポートがなければならない)

“只有一张票, 但是大家都要去, 怎么办好?”
(切符は一枚しかないのにみんな行きたがっている。どうすればよいのでしょうか)

“喝了酒开车要出事故的。”
(お酒を飲んで車を運転すると事故を起こすよ)

動詞、接続詞として (欲しい、要求する、かかる、必要とする)

“我跟他要一张说明书。”

(私は彼に説明書を貰う)

“这架照相机我不要了, 你要的话给你。”

(このカメラは私は要らないから、君が要るなら、あげるよ)

“要去新宿, 应该坐地铁又方便又快。”

(新宿へ行くならば、地下鉄が一番便利で速い)

“屋子里太热, 树阴低下要凉快得多。”

(部屋の中はとても暑い、木陰はきつとずっと涼しいと思う)

“坐飞机比坐火车要快得多。”

(飛行機に乗る方が汽車に乗るよりずっと速い)

③ 「願望」を表すものには “要” と “想” があるといったように、一般に肯定型の場合はさまざまな能願動詞を使い分けて微妙なニュアンスの差を言い表す。それをまとめると下記のような表になる。

比 較 表		
願望・意欲	必然性	蓋然性
要・想	要	要

上記の表を例文にすると次の通りである。

a. 願望・意欲

“想” ……しように思う。……したい

“你想看电影吗?”
(あなたは、映画がみたいです)

“他很想上大学。”
(彼は大学へとても行きたいと思っている)

“要” ……するつもりだ。……したい。
“我要喝咖啡”
(コーヒーが飲みたい)

“病人就要出院了。”
(病人は間もなく退院する)

b. 必然性

“要” (……なければならない。)

“我们要向他学习。”
(われわれは彼に学ばなければならない)

“你要好好地注意身体。”
(君はたえず健康に注意しなければならない)

c. 蓋然性

“要” (……のはずだ) (“会”より主観性が強い)

“今天要下雨。”
(今日は雨が降るだろう)

“王先生今天要来的。”
(王さんは今日は来るに違いない)

Ⅲ. 傾向性の“要”

上記で紹介してきたように“要”が有する意味は多様であるが、ここで再度その「可能性」について、他の方法で代表例を2例ばかり挙げて分析したい。

“看样子,要下雨了。”

(空の様子を見ると、間もなく雨が降る)

この例文を見たときに、空が暗くなり雨が降るか、じゃじゃ降っている様子が想像される。したがって、次例のように事態発生を暗示する何らかの推測的な表現が生まれる。

“比赛快要结束了。”

(試合は、間もなく終了する)

“要”が表す可能性は、話者が事態発生を確信しうほどの条件が整っており、“現在”との関りの深さを指摘できる。言い換えれば、今と、未来に発生するだろう事態とが直結していて、現在がすでに事態成就に向かう過程の一部になっているということである。そのために、現在の状況(根拠)と深く結び付いていることが特徴となる。次に

“喝了酒开车要出事故的。”

(お酒を飲んで車を運転すると事故を起こすよ)

“不听我的话要失败的。”

(私の話を聴かないと失敗するよ)

上記の例文はそれぞれの主体に「事故を起こす」や「失敗する」というような可能性があることを言うが、発話する或いは話をするときの状況、つまり経験を前提とした表現であるので、これは最も確実な事態発生の可能性を指す根拠であろう。

“要”は、このように「経験的な可能性」を表すこともできる。以上まとめれば、“要”は、現在の直接的延長線上にある事態の発生や、或は、確固たる根拠があり、未来においてもその事態発生が保証されているような可能性をいうものである。

“要”が表わす「可能性」とはつまり「趨勢」(或は傾向性)なのである。次に例文をとりあげてみたい。

“要”の他の用法は現在と連続した近い未来において「・・・しそうだ」という事態に対する場合に使われるため、後続する述語に「未然」や「動作」というものに特徴がある。

* 近接未来に関する判断

(○) “他要来了。”(彼はもう来るだろう・来そうだ)

(○) “天要下雨了。”(雨が降りそうだ)

* 未来に関する判断

(×) “明天要下雨。”(明日雨が降るだろう)

* 現在の状態に関する判断

(○) “这箱橘子要有十公斤。”(この箱のみかんは10キロでなければならぬ)

* 過去の状態に関する判断

(×) “这箱橘子昨天要有十公斤。”(この箱のみかんは昨日、10キロあるべきだった)

以上の結果を表にまとめると次のようになる。

近接未来	未来	状態	過去動作	過去状態
要	×	要	×	×

Ⅳ. おわりに

本稿は“要”“想”の分類によって意味や機能が異なり、それは構造的な違いの反映であることを見てきた。これまでは動詞の中心語の範囲内の現象として考えられてきた傾向があった。しかし、目的語の中心語となっている品詞によって構成される状況語の役割は無視できないであろう。もっと分かりやすく言うと、助動詞にかかる状況語、述語全体にかかる状況語、目的語に含まれる状況語はそれぞれの役割を担っており、勝手に位置を換えてはいけない。状況語の位置が変わった場合、当然その意味も変わるであろう。従って、この多様な“要”に対し、特に“想”との関係についても、さらに検討の余地があると思い、これらの詳細な分析に関しては今後の課題としたい。

参考図書：

現代中国語文法総覧(くろしお出版)
中国語文法概論(光生館出版)
中日大辞典(大修館出版)
誤用から学ぶ中国語(白帝社)
第52回中国語予稿
現代漢語八百詞(商務印書館出版)
中国語の文法書(同学社出版)
实用漢語語法(北京語言学院出版)
实用漢語語法三百点(新世界出版社出版)
中国語学(H8第243号)